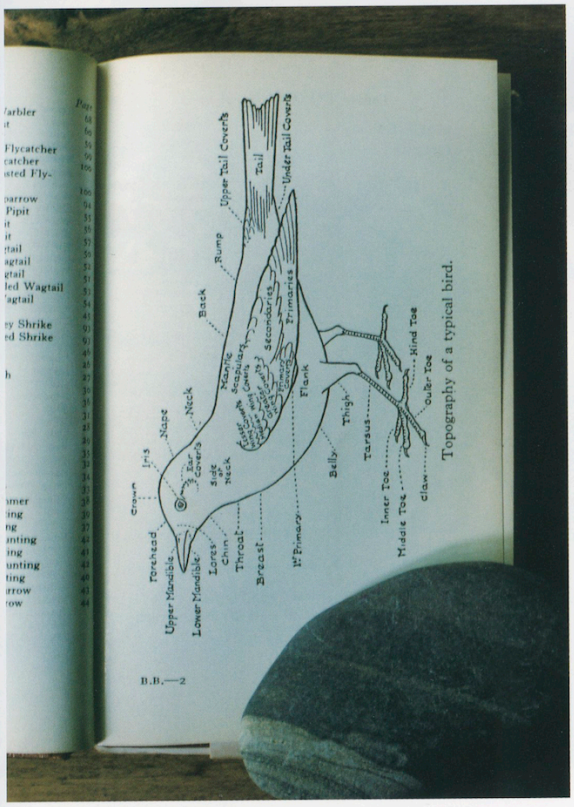

選：佐内 正史

書物の一部（鳥）をカッターで切り取り、樹木の合間に置いている。それが手法に全く見えなくて、すごく素直に見れる。この人はきっと写真家になりたいんだなぁと思いました。緊張感があるんだけど閉じ込めてなくて、閉じ込めないように撮っている。鳥の影響かもしれません。キリッとしています。真ん中ちょっと上にピントがあっていてキレイです。ちょっとピュア。すごくいいと思う。

吉楽 洋平

1979年　新潟県生まれ
2002年　日本大学芸術学部写真学科卒業
2009年　ホンマタカシ「たのしい写真　よい子のための写真教室」参加
2011年　The Chelsea International Fine Art Competition 2011
　　写真新世紀（第34回公募）佳作受賞（佐内正史選）
　　写真新世紀東京展2011（東京都写真美術館）
2012年　個展「Quietude」@SLANT gallery

2012年度（第35回公募）

優秀賞選出審査会総評

評：大森 克己

表現のバリエーションが少なく、萎縮した感じを受けました。もっとみんな写真にロマンを感じて欲しい。強度のある作品を見てみたいです。

写真は入口が広いし、写真にかける思いを強く持って勉強して、いろんなことに挑戦して欲しい。写真はレンズの前にあるものしか写らない。だからこそ、遠くのことも考えてみて欲しいということ。審査員がどうとか、去年の受賞作がどうとか、現代美術のトレンドがどうだというようなことはどうでもいいわけで、人間がなぜ生きているのか、なぜモノを作りたいのか、世の中の仕組みとか…。美的なことでも倫理的なことでも政治的なことでも何でもいい。いろんなモチベーションがあると思います。それらを一生懸命考えて欲しいと思いました。

それから、デジタル写真にしても銀塩にしても「モノとしての仕上がり」ということに気を使って欲しい。応募されたデジタル写真を見ると、そのほとんどが非常に安っぽい。そして銀塩プリントのほとんどはあまりにも古くさくみえる。そうではないものを見たい。それは方法論なのか思考の丁寧さなのかはわからないけれど。

評：佐内 正史

まず最初に、自分の気持ちというよりも、写真のことがあるような作品が見つかってそれがよかった。そういう作品を優秀賞に選びました。

露出を合わせるとかピントを合わせるとか、そういうことが写真のこと。普通に見ていて気持ちがいいというのは、自分のことじゃなくて写真のことに近いことで、近づいているんだと思います。

少し上向き、少し下向き、少し横向きというのはすごく気になるところだし、横長のものを広く撮る、縦長のものは縦に広く撮るという感じは、熱いものを熱く、寒そうなものを寒そうに撮るのと同じこと。例えて言うならば、おいしいオレンジジュースとかと一緒。おいしいオレンジジュースは、それだけでいい。そこに何か余計なものは必要なくて、とやかく言わずにおいしいということ。何か足さなくてもそれであるということ。単純。ただの写真。そういう感じがしてくる写真が結構あって、去年より全然いいと思いました。

評：椹木 野衣

自分の撮った作品に対して自省できていないというのか、顧みられていない作者が多いという印象を全体に持ちました。その傾向が何に由来しているのかはわからないけれど、写真の新世紀を切り開くと言うよりは、写真を撮っている自分に依存して自我を保っているようなものが目立っているのが気になりました。

今年この会場で思ったことは、見る側の自分もどんどん変わってきていて、身体的に見るようになってきているということです。広い通路を歩きながら、ブックも基本的には立ったまま見て、もちろん目で見るんですけど、大きな頁をめくるなど常になんらかのアクションを伴っている。そういう観点から、目だけではなく、身体そのものに訴えかけてくる写真を選んでいるということは言えます。

評：清水 穣

今回も、互いによく似た作品がある種の傾向をなしていました。1つは、デジカメでかっちり捉えた日常スナップ。ストレートスナップではあるが幾何学的で、作為的な風景に見える、など。比較的暗めの雰囲気もモチーフもあまりにも似ていて、「ネオコンポラ」的表現はそろそろ飽和状態にあるのではないかと